

# 共同研究の経緯と概要

岩城卓二

【はじめに】

本書は、国立歴史民俗博物館が一九九三年度から一九九五年度にかけて実施した共同研究「在郷町の成立と展開―桐生新町の分析―」の報告書である。

国立歴史民俗博物館では、創設当初より、都市と基層信仰を共同研究の二大テーマとして研究を進めてきた。既刊の報告書をみれば明らかのように、二つの共同研究には館内外から多くの研究者が参画し、大局的な視野から研究が進められ、貴重な成果が生み出されている。本研究はこれら共同研究に比すと、目的や研究対象地域が限定されているという点、館内三名・館外八名という人員の点においても小規模である。そのため、本研究を共同研究として位置づけることについては、とくに課題設定の視野が狭すぎるといふ点で批判的な意見があった。また、共同研究とは、さまざまな地域・素材を扱い、それらを比較検討することで次なる研究課題を抽出するものであり、対象地域が桐生新町という一地域に限定されていることを疑問視する声もあった。こうした反対にもかかわらず、当時の研究委員会が小規模な共同研究を推進した意図は、都市と基層信仰という二大テーマが一応の区切りを迎え、次なる課題を設定する過渡期にあった当時、小規模な共同研究の成果から次なる大きな課題を模索できないかと考えたこと、小規模なテーマも認めることで、新

しく館員となった若手や地域で研究を進める人々にも、より参画の可能性が広がり、国立歴史民俗博物館のさらなる活性化が期待されることになったと理解している。残念ながら本研究は、そうした期待に十分に 대응することができたとはいえず、共同研究としての成果には問題もあろうが、所収した個々の論文にはみるべき成果があり、今後のこの方面の研究に大いに寄与するものと考ええる。

【目的】

近世においては、町方(都市)と在方(農村)が明確に区分され、どちらに把握されるかによって、住民の身分や支配形態は異なった。在郷町とは、交通の要衝、物資の集積地、定期市がたつ流通の中心地として発展・展開しながら、在方の一形態として扱われることが多い都市的な場のことである。また、領主の陣屋がおかれる支配の拠点であることもあった。群馬県東端部に位置する桐生新町は、こうした在郷町のひとつであるが、当町はすでに近世・近代史研究者の間ではよく知られた場所である。当町をめぐる研究の推移については、本書所収の横山伊徳論文に詳しいが、桐生出身の羽仁五郎が桐生・足利の織物業ではマニユファクチュアが行われていたと論じて以来、注目され、戦前においては桐生Ⅱ「自由都市」という位置づけが与えられた。戦後になると、在郷町研究は近世

史研究の主要なテーマのひとつとなり、幕藩体制の流通構造上における在郷町の位置づけをめぐる議論が深められた。また、幕末期には在郷町において階級闘争が激化することから、近世から近代への移行を考える素材としても研究の関心が向けられた。桐生新町もこうした動向のなかでしばしば注目され、天保年間の足利絹市との対立とそれにとまなう桐生織物仲間の動向等は、近世後期の社会像を論じるための素材として、通史などでも取り上げられた（津田秀夫『天保の改革』、小学館）。桐生新町は、戦前戦後を通じて、近世史像を構築するためのフィールドとして熱い視線が向けられてきた場所だといつてよい。

ところが、一九八〇年代にはいると、近世史研究の問題意識の変化にともない、桐生新町への関心は次第に弱くなっていった。また、戦後近世史研究における関心の高さからすると、一見豊富に思える当町の研究も、大きくは流通史・階級闘争史の観点からの分析に集約することが可能であり、桐生新町を構成する各町の構造、住民の社会関係、町制機構、あるいは民衆生活史等々、その内部構造にまで分け入った研究は意外に乏しい。むしろこうした研究は、現在も刊行される『桐生史苑』の刊行にみられるように桐生の地に根ざす人々の手でなされ、それは多くの近世・近代史研究者の関心が桐生から離れていった以降も地道に続けられてきたといつてよい。

本研究ではこうした桐生新町の研究動向をふまえ、次のような課題を設定した。

① 桐生の地で蓄積された研究成果や史料残存状況を把握すること。これは、今後の研究を深める手がかりを得るためである。

② 住民構造を読み解くこと。桐生新町には一九世紀以降の宗門改帳が残されており、同町を構成する六町分すべてのものが残存する年も少ない。これは同町の住民構造を知るうえで貴重な史料であるが、これまで十分に活用されてきていない。そこで本研究ではこの宗門改帳

から同町の住民構造を読み解くことを第一の課題とする。

③ 在郷町の経済的役割について、商人の経営分析や周辺農村との関係から検討する。

④ 祭礼をはじめ民衆生活史の側面から在郷町を検討する。

⑤ 古代・中世・近代の様相にも目を向け、近世の桐生新町の特質をより鮮明にする

#### 【組織】

板橋春夫 伊勢崎市中央公民館

梅村佳代 奈良教育大学教育学部

久留島浩 千葉大学教育学部

菅原征子 歴史学会理事

杉森玲子 東京大学史料編纂所

堀越靖久 桐生市立図書館

松浦利隆 群馬県立群馬高校

松村 敏 金沢大学教育学部

岩城卓二 国立歴史民俗博物館歴史研究部

小林忠雄 国立歴史民俗博物館民俗研究部

高橋 敏 国立歴史民俗博物館歴史研究部

研究協力者

横山伊徳 東京大学史料編纂所

※所属は一九九三年当時

#### 【研究期間】

一九九三年度～一九九五年度

【経過】

一九九三年度

第一回研究会 九月十七日 国立歴史民俗博物館

堀越靖久 「在郷町桐生新町の研究成果と課題」

高橋 敏 「近世家族の肖像―桐生新町吉田家の分析―」

第二回研究会 十月十七日～十八日 桐生市立図書館

松浦利隆 「桐生の近代遺蹟」

堀越靖久 「在郷町桐生関係資料の検討」

現地見学会

第三回研究会 三月二十日 国立歴史民俗博物館

岩城卓二 「十七世紀在郷町商人の経営―下総国佐原伊能家を中心に―」

一九九四年度

第一回研究会 九月十五日 国立歴史民俗博物館

杉森玲子 「近世前期における町場の構造」

岩城卓二 「十七世紀利根川流域在郷町の歴史的性格」

第二回研究会 十一月十一日～十三日 桐生市立図書館

小林忠雄 「在郷町の民俗的特質」

松浦利隆 「桐生周辺の機織・在来技術について」

現地見学会

第三回研究会 二月九日～十日 国立歴史民俗博物館

板橋春夫 「桐生新町の天王祭祀」

菅原征子 「桐生の古代・中世」

高橋 敏 「桐生吉田家の子弟教育」

一九九五年度

第一回研究会 七月七日 国立歴史民俗博物館

松村 敏 「近代における桐生周辺村落の家族動態」

高橋 敏 「桐生研究の一、二の問題点」

堀越靖久 「高橋敏著『村の手習い塾』をめぐって」

第二回研究会 十一月十日 国立歴史民俗博物館

岩城卓二 「在郷町における『行政』と担い手」

久留島浩 「桐生新町の火消しの歴史的性格をめぐって」

第三回研究会 二月八日 国立歴史民俗博物館

梅村佳代 「文化三年の宗門帳よりみた桐生新町の家族構成と奉公人」

岩城卓二 「共同研究の成果と残された課題」

【成果と反省】

桐生において当地の地域研究を中心的に担ってきた方々とともに研究を進めることができたことや、現地見学会を行ったことで、桐生新町をめぐる現在の研究状況や史料の残存状況をかなり詳細に把握することができた。しかし、共同研究の性格上、現地調査の成果、たとえば取り壊し直前の遊郭建築の調査および経営者からの聞き取り等を十分に蓄積することができなかった。また、史料の所在が知られながら目録作成や写真撮影等がかなわなかった。この点からすると、本研究はフィールド調査が可能な特定研究として取り組むべきであったかもしれない。

研究員個々の研究報告は、充実したものが多く、一応、先の①～⑤の課題に即した報告が行われたものの、報告書に原稿としてまとめるには至らなかったものもあり、その点で不十分さは拭えない。しかし、同町の住民構造は、単純な上層と下層という区分をこえて、かなり詳細に明らかになった。また、従来手つかずであった宗教事情への着目、豪農の桐生新町進出という視点からの分析や、これまで経済史の分野で取り上

---

げられてきた織元のような上層民とは違う中層クラスの商人の動向が論じられたことで、桐生新町の研究は一層厚みを増したと考える。ただ、こうした個別研究をふまえて、在郷町論を論じるには至らず、共同研究の成果としては不十分さを残した。

(大阪教育大学教育学部、国立歴史民俗博物館共同研究員)